オック語における名詞形容詞複合語の分類

多賀　吉隆

1　はじめに

この論文の目的は、オック語において名詞と形容詞がこの順で現れる複合語を分類することである。それを通して、複合語形成における「外心性」について考えたい。

コマドリとアカヒゲという近縁のトリがいる。コマドリはトリの一種なので、単語の中に上位語を含んでいる。トリが主要部となり、コマドリのような単語は、内心的な複合語と呼ばれる。一方、アカヒゲはヒゲ自体ではないので、単語の中に上位語を含まない。このようなものは、外心的な複合語と呼ばれる。Bloomfield（1933）は、やはり近縁のヨーロッパコマドリのフランス語名 rouge-gorge（“赤い”-“のど”）をもちい、[[赤いのど] があるトリ] のような意味だと、外心的な複合語を説明した。

ところで、アカヒゲがどのような鳥かというと、のどの下の部分が黒く、全身が赤いものである。つまり[赤い[ひげがあるトリ]] のような意味になっている。この 2 つの意味の構造の違いは、外心性を 1 つの現象と考えてよいかを疑わせる。

以下、この節では、分類の準備作業をする。2 では形から分類をし、3 ではそれを受けて意味から分類する。4 では、それをもとに、どう分類すべきかについて議論をする。

1.1　複合語における主要部の二面性

Bloomfield（1933）の出しているトリの例を検討しよう。blackbird “クロウタドリ” は上位語 bird “トリ” を含むので、主要部があり内心的である。long-legs “セイタカシギ” は leg “脚” ではないので、主要部がなく外心的である。

これに続いて、フランス語の rouge-gorge をあげた。英語と違いフランス語には男女の文法性がある。gorge は女性名詞だが、rouge-gorge は男性名詞であることも強調している。

つまり、主要部に 2 つの基準があることになる。

(1) a. 主要部は、複合語の上位語である。
b. 主要部からは、複合語へ形式的な素性が浸透している。

では、この 2 つの基準が矛盾したときには、どうすればいいのだろうか。それを調べるために、フランス語より屈折が分かりやすいオック語をもちいる。

1.2 オック語における形容詞

この論文であつかうのは、ラングドック方言をもとにした参照オック語である[1)]。

現代オック語においては、形容詞は名詞を後ろから修飾することが多い。un dialecte occitan “オック語の方言” のようにである。修飾する形容詞は、名詞に文法性と数が呼応する。文法性は、他の西ロマンス語と同様に、男性と女性がある。女性の指標としては、-a をもちいる。la lenga occitana “オック語” のようにである。数には、単数と複数があり、複数の指標として -s をもちいる。例えば、de dialectes occitans となる。指標は、性・数の順である。de locucions occitanas “オック語の言い回し（複数）” のようにである。また、形容詞には名詞として使われるものもある。la lenga occitana に対して、男性名詞の l’occitan “オック語” のようにである。

形容詞と名詞の屈折は、ラテン語の第二曲用と第一曲用の対格に由来する。第三曲用であったもののほとんども、類推により、同様に屈折する。このことは、古オック語との大きな違いである。つまり、annal “毎年の” などは、古典語では性で変化しないが、現代語では女性形の annala がある。男性・女性で形が変化しない通性な形容詞は、flòri “花盛りの” や主格に由来する màger “主要な” など少数である。

1.3 「所有複合語」は必ず外心的なのか

今まで出してきたタイプの外心的複合語は、サンスクリット語複合語の分類をもとに、Bahuvrihi とも呼ばれている（例えば、Kastovsky（2009））。サンスクリット語では、形容詞・名詞の順で、名詞に屈折語尾がつき、名詞とし

ても形容詞としても働く。形容詞で修飾された名詞の意味するものを持っているということを意味し、「所有複合語」(possessive compound) と呼ばれることもある。一方、英語においては、名詞として long-legs、形容詞として long-legged のように言い分けなければならない。

オック語では、ヨーロッパコマドリを barbarós と呼ぶ。barba 名女 “あごひげ” + ros 形男 “朱い” と解析できるここで、注意しなければならないのは、barba が女性名詞であるにも関わらず、形容詞が男性形であることである。さて、文法性が呼応しないが、[[朱いあごひげ] があるトリ] のような意味構造を考えてよいのだろうか。

ところで、barbarós は “朱いあごひげがある” という意味の形容詞としても使うことができる。そのときの女性形は barbarossa である。ということは、barbarós が形容詞としては [あごひげが朱い] という構造で、名詞としては、[[あごひげが朱い] トリ] という構造なのかもしれない。そうすると、形容詞では主要部は ros で、内心的な複合語ではないのか。

このような問題を考えるために、barbarós の構造がどうであるか、その構造からは、複合語における主要部の概念をどう見直すべきなのかを考えたい。

1.4　どの範囲をあつかうのか

主な資料としては、語彙項目が多い正書法辞典である Ubaud (2011) をもちいる。ただし、これには意味が記載されていないので、Braç et al. (2002)、Alibert (1993)、Mistral (1932) などで補っている[2)]。この辞書において、名詞・形容詞が、この順で並ぶ項目を対象にする。これには、狭義の複合語に加えて、複合語類似句 (compound-like phrase) や偽複合語 (improper compound) と呼ばれるものも含まれる。つまり、屈折において、1 語としてふるまわないものも含んでいる。そのため、表記において、1 語のもの、2 語のもの、ハイフンで区切られたものがある。なお、オック語の文法書や辞書では、そのようなものも結束性が高いばあいは、複合語としてあつかうこと多い。

後半要素の形容詞には、名詞として使われる可能性があるもの、動詞から派生された動作主形容詞、動詞の過去分詞も含んでいる。例えば、形容詞 pescaire は動詞 pescar “魚を採る” から派生され、“魚を採るような” という意味で使われる。ただし、動作主を意味する名詞 “漁師” でもある。現在分詞に由来するものは、主な辞書で形容詞としてあつかわれているものに限っている。

なお、いくつかの形容詞においては、前方から修飾することもある。複合

語においては、形容詞・名詞の順のものも多いが、この論文ではあつかわない。また、連結要素を含む新古典複合語も含めない。例えば、nastòrt 形“鼻が曲がった”（nas 名男“鼻”+ tòrt 形男“曲がった”）は含めるが、nasitòrt 名男“コショウソウ（クレソンの一種）”は含めない。

2　屈折による分類

この節では、屈折から分類する。語例として女性名詞を含むものを原則としてあげる。これは文法性での呼応を説明するためであり、実際には性での偏りは観察されない。可算名詞を例として出すことが多いのも同様の理由による。

2.1　名詞と形容詞が性・数で呼応するもの

前半要素の性に後半要素が呼応し、複数形にしたばあいに両要素に指標があるものである。vaca marina 名女“エイ”（vaca 名女“雌ウシ”+ marina 形女“海の”）、pèira freja 名女“玄武岩”（pèira 名女“石”+ freja 形女“冷たい”）、camba lassa 名女“無駄足”（camba 名女“脚”+ lassa 形女“疲れた”）などがある。前半要素が身体の部分であるものとして、lenga lònga 名女“アカゲラ”（lenga 名女“舌”+ lònga 形女“長い”）があるが、後半の形容詞の形がラングドック方言で普通の longa ではなく、他方言からの借用の可能性がある。

2.2　性では呼応するが、数では呼応しないもの

前半要素の性に後半要素が呼応するが、複数形にしたばあいに後半要素のみに指標があるものである。carnmarina 名女“クラゲ”（carn 名女“肉”+ marina 形女“海の”）、aigamarina 名女“藍玉”（aiga 名女“水”+ marina 形女“海の”）などがある。前半要素が身体の部分であるものとして、cambacrusa 名女“妖怪（の一種）”（camba 名女“脚”+ crusa 形女“生の / 強張った”）、barbablava 名女“オガワコマドリ”（barba 名女“あごひげ”+ blava 形女“青い”）などがある。

2.3　性・数では呼応せず、複合語の性が固定しているもの

前半要素の性に後半要素が呼応せず、複数形にしたばあいに後半要素のみに指標があり、名詞としてのみ使われるものである。aigardent 名男“ブラン

デー”（aiga 名女“水” + ardent 形男“燃える”）、aiganaissent 名女“泉”（aiga 名女“水” + naissent 形男“生まれかけの”）、aigafòrt 名女“硝酸”（aiga 名女“水” + fòrt 形男“強い”）などである。数が少なく、形容詞が第三曲用だったものに限られる。

2.4　性・数では呼応せず、複合語の性が複数あるもの

前半要素の性に後半要素が呼応せず、複数形にしたばあいに後半要素のみに指標があり、形容詞としても使われるか、名詞としても有生のものを指して使われるものである。barbarós 名男“ヨーロッパコマドリ”・形“あごひげが朱い”、barbablanc 名男“年寄り”・形“あごひげの白い”（barba 名女“あごひげ” + blanc 形男“白い”）、cambalong 形“脚の長い”（camba 名女“脚” + long 形男“長い”）、manescrich 名男“原稿”・形“手で書かれた”（man 名女“手” + escrich 過分男“書かれた”）、carnsalaire 名男“豚肉加工業者”（carn 名女“肉” + salaire 形男“塩漬けをする”）などである。

2.5　まとめ

まず、単性の名詞としてふるまうことから、2.1・2.2・2.3 と 2.4 に分けられる。さらに、前者は統語的なふるまいが句か単語なのかで、2.1 と 2.2・2.3 に分けられる。そこで、形からは次の 3 つに分類できる。

（2）　a.　名詞化されうる形容詞や両性名詞としてふるまうもの
（2.4: barbarós “ヨーロッパコマドリ”、“あごひげの朱い”）
b.　名詞句としてふるまうもの（2.1: vaca marina “エイ”）
b’.　1 語の名詞としてふるまうもの（2.2: carnmarina “クラゲ”、2.3: aigardent“ブランデー”）

この分類は絶対的なものではない。例えば、rata penada ～ ratapenada 名女“コウモリ”（名女“雌クマネズミ” + 過分女“翼の生えた”）や、aiga bolida ～ aigabolida 名女“にんにくスープ”（名女“水” + 過分女“沸かされた”）は、b. と b'. の両方が観察される。また、barbablava のような例では、女性名詞しか観察されないので b’. になるが、カタロニア語では対応する形容詞 barbablau がある。

以下では、区別のため、a. を「所有型」、b. を句型、b’. を一語化型と仮に呼ぶことにする。後でみるように a. の名称は必ずしも適切ではない。

3　意味による分類

前節での形による分類をもとに、さらに意味で分類をする。前半要素が男性名詞のものも語例に含めるようにする。ただし、語例は分類が明らかなものを原則としてあげている。

3.1 「所有型」

2.4 であつかったタイプを分類する。つまり、文法性が固定されていないものである。

3.1.1　後半が動詞派生でないもの

前半要素が人を含む生物の部分であり、後半部分が前半部分を意味的に修飾し、前半部分を所有するという意味の形容詞もしくは所有者をさす名詞になる。例えば、barbarós 名男 “ヨーロッパコマドリ”・形 “あごひげが朱い”、pellong 形“毛の長い”（pel 名男“毛”＋形男 long “長い”）、coalong 形“尾の長い”（coa 名女 “尾”＋形男 long “長い”）、cambacort 形 “脚の短い”（camba 名女 “脚”＋形男 cort “短い”）である。pènud “裸足の”（pè 名男 “足”＋形男 nud “裸の”）のように偶発的な性質のときもある。また、比喩的な意味で使われるばあいもある。ventreprim 形 “腹の細い”（ventre 名男 “腹” + prim 形男 “細い”）は、形“飢えた” の意味でも使われる。

3.1.2　後半が動詞派生のもの

前半要素が人を含む生物の部分が過去分詞になっている後半要素の主題（theme）、いわゆる目的語になり、前半部分を所有するという意味の形容詞もしくは所有者をさす名詞になるものが多い。例えば、cambaplegat 形 “脚に障害のある”（camba 名女 “脚” + plegat 過分男 “折れた”）、pelfrisat 形 “巻き毛の”（pel 名男 “毛” + frisat 過分男 “カールした”）、pèlfronzit 形 “皮に皺のある”（pèl 名男 “皮” + fronzit 過分男 “皺を作った”）である。とは異なり、前半要素が身体部分でない aigabegut 形 “枯渇した”（aiga 名女 “水” + begut 過分男 “飲まれた”）のようなものもある。なお、còltòrcer 他動 “締め殺す”（còl 名男 “首”+ tòrcer 他動 “捻る”）に由来する còltorcit 形 “絞められた”（còl 名男 “首” + torcit 過分男 “捻られた”）のように、主題を抱合した動詞があるものもあるが、*aigabeure のような対応する動詞がないものの方が多い。

後半が動作主のものは数が少ないが、前半部分には身体部分という制限

なく、所有の意味も表さない。このばあい、関連する語彙がある。例えば、pèiraficaire 名男 “舗装業者”（pèira 名女 “石” + ficaire 形男 “固定する”）には動詞 pèiraficar “舗装する” がある。carnsalaire 名男 “豚肉加工業者”（carn 名女 “肉” + salaire 形男 “塩漬けをする”）には *carnsalar という動詞はないが、carnsalada 名女“豚肉製品”（carn 名女“肉” + salada 過分女“塩漬けにした”）という単語がある。

前半要素が具格（instrumental）のもの manescrich 名男 “原稿”・形 “手で書かれた”（man 名女 “手” + escrich 過分男 “書かれた”）もあるが数は少ない。ただし、*manescriure という動詞はないが、pèirabatre 他動 “石を投げて殺す”（pèira 名女“石” + batre 他動“打つ”）のように具格を抱合した動詞はあり、過去分詞や動作主名詞を作ることができる。

3.2　句型・一語化型の分類

2.1・2.2・2.3 であつかったタイプを分類する。つまり、文法性が固定されているものである。ただし、2.3 のタイプでは方言によって性が異なるばあいもある。

3.2.1　類内区分

前半の名詞を後半の形容詞が限定しているものである。pèira 名女 “石” に対して pèira freja 名女 “玄武岩” や pèira mòrta 名女 “片岩”（pèira 名女 + mòrta 過分女 “死んだ”）、liri 名男 “ユリ” に対して liri salvatge 名男 “マルタゴンリリー（liri 名男 + salvatge 形男 “野生の”）などがある。一語化しているものは見付からなかった。

3.2.2　類間区分と比喩

類間区分としたのは、前半の名詞を後半の形容詞によって複数の領域に移しているものがあるからである。例えば、男性 bernat は固有名詞 Bernard に由来するので、特に意味はないが、bernat pescaire 名男 “サギ”（bernat 名男 + pescaire 形男 “魚を採る”）や bernat pudent 名男 “カメムシ”（bernat 名男 + pudent 形男“臭い”）がある。

多いのは比喩であり、前半の名詞を後半の形容詞によって別の領域に移しているものである。例えば、vaca 名女“雌ウシ” に対して vaca marina 名女“エイ” や vaca petosa 名女 “ミソサザイ”（vaca 名女 + petosa 形女 “臆病な”）があり、lop 名男 “オオカミ” に対して lop cervièr 名男 “オオヤマネコ”（lop 名男 +

cervièr 形男 “シカの”）や lop marin 名男 “アザラシ”（lop 名男 + marin 形男 “海の”）がある。

比喩のばあいには、一語化しているものがある。carn 名女 “肉” に対して carnmarina 名女 “クラゲ” や、aiga 名女 “水” に対して aigamarina 名女 “藍玉” のようにである。さらに、rata 名女 “雌クマネズミ” に対して、rata penada ～ ratapenada 名女 “コウモリ” のように一語化しない・するが話者によって分かれるものがある。

3.2.3　換喩

後半が第三曲用だった aiganaissent 名女 “泉” は換喩の一語化された例と考えることができるであろう。固有名詞まで範囲を広げれば、地名の Aigas Mòrtas（“淀んだ水” aiga-s 名女複 + 形女複 mòrt-a-s）、男性の Barbablava “青ひげ（童話の登場人物）” などがある。

身体の一部で全体を指すものは、lenga lònga “アカゲラ”、barbablava “オガワコマドリ”以外にも bècgròs 名男“シメ”（bèc 名男“くちばし” + gròs 形男“太い”）patanegra 名女 “ノハラツグミ”（pata 名女 “肢” + negra 形女 “黒い”）などがある。句である lenga lònga 以外は、「所有型」がもっぱら片方の性で使われている可能性もある。

4　議論

以下では、このようなオック語の名詞形容詞型複合語を一般的な複合語の分類にあてはめられるのかを考える。

4.1　句と一語化

オック語の古典的な Adams（1913）や Ronjat（1980）は、主にフランス語をあつかった Darmsteter（1894）を受けて、併置と狭義の複合語に分けている[3)]。前者から後者が歴史的につくられると考えられている。つまり、前者が句で、後者はそれが一語化（univerbation）されたものである。この考えでは、“コウモリ” を複数形にしたときの ratas penadas ～ ratapenadas のような変異が説明できる。また、aigamaringa のような比喩でも意味が不透明なものや、aiganaissent のような後半がもと第三曲用であり形態的に不透明なもので、一語化が進んでいることは、歴史的な過程であることを示唆する。

しかし、barbarós のようなものは説明できない。aigamarina のようなものとは異なり、後半要素が前半要素に性で呼応していないので、句が一語化されたとは考えにくい。

4.2　要素と全体、要素間の関係

Bloomfield（1933）は、要素間の関係、要素と全体の関係で分類をした。要素間の関係については、統語的、半統語的、非統語的に分けている。要素と全体の関係については、内心的、外心的に分けている。ただし、主要部の概念が複合語に関しては、不明確な点がある。blue-bottle “オオクロバエ” のような例で、ハエ自体が似ている比喩と考えれば内心的であり、そのような部分がある換喩と考えれば外心的であるとしている。

20 世紀後半以降の分類でも、内心性・外心性は重視されている。主要部について、Bloomfield（1933）では、上位語であることを重視しているが、Lieber（2004）などの語彙主義者では、形式的な素性の浸透を重視している。例えば、Ingo（2003）では、redskin のようなものを形式的には skin が主要部であるとしている。

Scalise らは、複合語の類型論を確立しようと、内心性・外心性の明確化と要素間の関係の整理をしようとしている（Bisetto and Scalise 2005）。(2) の a の意味での主要部を意味的主要部（semantic head）、b の意味でのものを形式的主要部（formal head）と呼び、内心性（endocentricity）を次の条件全てを満たすものと定義している（Guevara and Scalise 2009: 113）。

(3)　a. 意味的主要部が 1 つだけある。
　　b. 形式的主要部が 1 つだけある。
　　c. 意味的主要部と形式的主要部が一致する。

要素間の関係で、ここで問題になるのは、従属的（subordinate）と限定的（attributive）である[4] love story では、story が語るものが love であり、love は story の項になる。このようなばあいが、従属的である。一方、blackbird では、black が bird を修飾しているので限定的である。

この分類では、vaca marina, aigamarina が限定的で内心的、lenga lònga, aiganaissent が限定的で外心的になる。では、形容詞 barbarós ではどう考えればよいのだろうか。

やっかいなのは、形容詞と名詞の関係において、従属的であろうと、限定

的であろうと、形容詞が名詞を下位範疇化していることである。つまり、2つの要素だけからは、いずれか判断できない。仮に、要素間の関係が限定的とすると、名詞句 barba rossa が形容詞化されたものと考えられる。ここで問題になるのは、名詞句がどのように形容詞となるかである。仮に、従属的とすると、ros の項 barba が付加されたものになる。ここで、問題になるのは、ros に満たされていない項がないのに、なぜ修飾することができるかである。barbarós なものは、全体を考えると、朱くないのである。

4.3 「所有型」形容詞の形成

この項では、barbarós のような形容詞において要素間の関係を決めている語形成の方法を検討する。

4.3.1 句派生

形容詞 barbarós が名詞句 barba rossa から派生されると考えてよいのだろうか。

Lehmann（1970）は、Bahuvrihi について、名詞句から派生していると考えている。例えば、ラテン語の形容詞 magnaimus “度量の大きな” が、名詞句 magnus animus（形男 “大きな” + 名男 “魂”）から派生するとする。そして、このような形容詞が名詞の所有者を項としてもてることをラテン語の所有者を示す与格を傍証としてあげる。オック語においても、所有者を与格とする構文は、以下の例 a, b のように確かにある。

（4） a. Lo cap me dòl.
定冠詞 名“頭” 代名詞“私に” 動“痛む”
私の頭が痛い。

b. Lo vailet t’ èra amic.
定冠詞 名“使用人” 代名詞“お前に” 動“であった” 名“友”
あの使用人は、お前の友だった。

c. Aquel capèl es de papà.
限定詞 名“帽子” 動“である” 前置詞“の” 名“お父さん”
あの帽子はお父さんのだ。

しかし、用例として多い a のようなものでは、むしろ経験者である。b のようなものも関係を示すとも考えられる。所有を表す一般的な表現では、例 c のように前置詞を de を使う。そこで、ラテン語から継続している、句派

生による Bahuvrihi 複合語とは考えにくい。

さらに、現代オック語では、名詞から形容詞への派生に、通常、明示的な接辞をともなう。例えば、地名の Aigas Mòrtas から形容詞 aigasmortenc（もしくは aigamortenc）が派生される[5)]。

これらのことから、名詞句からの派生は考えにくい[6)]。

4.3.2　抱合

形容詞 barbarós を形容詞 ros に項 barba が付加されたものと考えてよいのだろうか。

3.1.2 で述べたように、オック語の動詞には、生産性が高くないとはいえ、抱合がある。このとき項の格付与が変わることがある。例えば、tòrcer “捻る” は動作主を主語に、主題を直接目的語（対格）に、主題の所有者でもある経験者を間接目的語（与格）にするが、主題を抱合した còltòrcer “締め殺す” は経験者を直接目的語（対格）にする。後半要素が動詞派生であるものは、必ずしも動詞の存在が確認できないにせよ、この抱合によると考えてよいのではないだろうか。

抱合は、動詞のものと考えられることが多いが、形容詞についても認める立場もある（例えば、Harley（2009））。問題になるのは、形容詞が所有者を項にできるかどうかである。参考として、修飾節を考えたよう。形容詞 cambalong “脚が長い” をパラフレーズすると、a の方が自然であろうが、b のようにも言える。

(5)　a. qu’　a　las　cambas　longas
　　接続詞　動“持つ”　定冠詞　名女複“脚”　形女複“長い”
　　長い脚を持つ

　　b. que　las　cambas　ne　son　longas
　　接続詞　定冠詞　名女複“脚”　代名詞“それの”　動“である”　形女複“長い”
　　脚が長い

このようなパラフレーズからは、必ずしも所有物が身体部分、所有者が有生であることという制限が出てこないが、語彙的な規則として、項として組み込まれるのが有生な所有者であるとする制限があると考えられるのではないか。

つまり、断定はできないものの、オック語の「所有」形容詞は、句派生形

容詞と考えるより、抱合により形成されると考えられる。これが正しいとすれば、「所有」形容詞はむしろ内心的である。

4.4 「所有」複合名詞はどうなるのか

名詞 barbarós をどう考えればよいのであろうか。

オック語において、1.2 で説明したように、形容詞が名詞として使われることが多い。例えば、“オック語” を la lenga occitana と言えば、occitan は形容詞であり、l’occitan と言えば、名詞である。

ロマンス語の特徴的な複合語であり、外心的と考えやすい動詞名詞型についても、多賀（2011）で示したように、必ずしも名詞ではなく、形容詞と名詞の両方としてふるまう pòrtacòp “名高い（人）” のようなものがある。動詞名詞型では性や数で屈折しないが、これは語形成の方法の違いであろう。多賀（in press）では、フランス語の俗語をデータに動詞・名詞型と動詞・定冠詞・型の分布の違いから、これらが句から音韻論的な制約に従いながら単語を単位に削除が起こる略語であると主張した。名詞を形容詞に抱合している barbarós で後半要素が屈折することは、自然である。

祖語であるラテン語と同様に、名詞と形容詞が明確でないオック語のような言語においては、狭義の名詞と形容詞の上に、両方を含むカテゴリーが必要である。狭義の名詞として働く場合であっても、品詞転換が起こったと考える必要性がない。

5 おわりに

この論文では、オック語の名詞形容詞型複合語が、名詞句（vaca marina）、句が一語化された名詞（aigamarina）、名詞が抱合された動詞派生語（aigabegut）、名詞が抱合された形容詞で名詞としても働くもの（barbarós）に分けられると論じた。そして、最後のものでは、抱合される名詞の所有もしくは所有者を意味し、いわゆる Bahuvrihi 複合語に類似しているが、抱合される名詞が身体部位に限ることなどから同一視することはできないと主張した。

外心的複合語は、内心的複合語以外にすぎず、雑多なタイプの複合語の寄せ集めである。このため、内心性・外心性は複合語の分類において、重要性が低いと考えざるをえない。

注

1) 標準方言のようにあつかわれるが、規範性はそれほど強くない。

2) Ubaud（2012）による修正も使っている。

3) Darmsteter（1894）は、小辞の付加も含めているが、ここでの議論には関係ない。

4) Bisetto and Scalise（2009）では、関係の分類が一部見直されているが、ここでの議論には直接関係しない。

5) Ubaud（2011）が選んでいるのは、複数の指標がある aigasmortenc である。Estats Units からの派生では、Ubaud（2012）で、複数の指標がない estatunitenc から指標がある estatsunitenc に訂正している。実際の用例では、指標がないものも多い。

6) ただし、ここで検討しているばあい以外で、句派生が複合語を作っている可能性はある。例えば、オランダ語の klassieke gitaar “クラッシクギター” の形容詞には屈折語尾があるので句である。一方、意味的にはこれから派生される klassiek gitarist “クラッシクギター奏者” は、形容詞に屈折語尾がなく句ではなく、みかけ上、狭義の複合語である。

参照文献

Adams, Edward L. (1913) *Word-Formation in Provençal*. New York: The Macmillan Company.

Alibert, Louis (1993) *Dictionnaire occitan-français*. 5th edition. Toulouse: Institut d’Études Occitanes.

Bisetto, Antonietta and Sergio Scalise (2005) “The classification of compounds.” *Lingue e Linguaggio*. Vol. 4. No. 2. pp. 319-332.

Bisetto, Antonietta and Sergio Scalise (2009) “The classification of compounds.” In Lieber and Štekauer (2009) pp. 34-53.

Bloomfield, Leonard (1933) *Language*. Holt.

Braç, Mirelha, Robèrt Martí, Alan Rochi, and Joan-Claudi Sèrras (2002) *Tot en òc: diccionari elementari illustrat segon los parlars lengadocians*. IEO edicions.

Darmsteter, Arsène (1894) *Traité de la formation des mots composés dans la langue française comparée aux autres langues romanes et au latin*. Paris: Barillon.

Guevara, Emilianao and Sergio Scalise (2009) “Searching for Universals in Compounding.” In Sergio Scalise, Elisabetta Magni, and Antonietta Bisetto. eds. *Universals of Language Today*. Springer. pp. 101-128.

Harley, Heidi (2009) “Compounding in Distributed Morphology.” In Lieber and Štekauer (2009) pp. 129-144.

Ingo, Plag (2003) *Word-Formation in English*. Cambridge Textbooks in Linguistics. Cambridge University Press.

Kastovsky, Dieter (2009) “Diacronic perspectives.” In Lieber and Štekauer (2009) pp. 323-340.

Lehmann, Winfred P. (1970) “Proto-Indo-European compounds in relation to other Proto-Indo-European

syntactic patterns." *Acta Linguistica Hafniensia*. pp. 1-20.

Lieber, Rochelle and Pavol Štekauer. eds. (2009) *The Oxford Handbook of Compounding*. Oxford University Press.

Lieber, Rochelle (2004) *Morphology and Lexical Semantics*. No. 104 in Cambridge Studies in Linguistics. Cambridge University Press.

Mistral, Frédéric (1932) *Le Trésor du Félibrige ou dictionnaire provençal-français*. Paris: Librairie Delagrave.

Ronjat, Jules (1980) *Grammaire Istorique[sic] des Parlers Provençaux Modernes*. Reprint of the editions of 1937 and 1940. Vol. 3-4. Genève: Slatkine Reprints.

多賀吉隆 (2011)「オック語における外心的動詞名詞複合語」『津田塾大学紀要』第 43 号、pp.151-165.

多賀吉隆 (in press)「動詞・名詞型複合語の形成に関係するフランス語の音韻論的な制約」『ロマンス語研究』第 45 巻.

Ubaud, Josiana (2011) *Diccionari ortografic, gramatical e morfologic de l'occitan: segon los parlars lengadocians (109000 intradas).* Editions Trabucaire.

Ubaud, Josiana (2012) "Fautas, cauquilhas, mancas e remarcas divèrsas dins lo Diccionari Ortograc.". http://josiane.ubaud.pagesperso-orange.fr/Fautas%20Dicort.doc (access: 2012-09-20).